

国語

2023年2月10日（木）

一般入学試験

<注意事項>

1. 受験票は机の右上に受験番号が隠れないように置くこと。
2. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
3. 試験中は机の中に何も入れず、机の上には鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム以外の物は出さないこと。
4. 試験中に問題冊子の印刷不備等に気づいた場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 試験中に体調が悪くなった場合は、遠慮せずに早めに試験監督に知らせること。
6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置くこと。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。



文華女子高等学校

第一問

- ① 日本文学の流れを 説する。 「ア外 イ概 ウ該 エ概」
- ② 人気商品を買 める。 「ア強 イ締 ウ占 エ閉」
- ③ に浸る。 「ア干渉 イ感傷 ウ鑑賞 エ緩衝」
- ④ 事実と認める。 「ア規制 イ帰省 ウ寄生 エ既成」
- ⑤ 意味 。
- ⑥ 混同。 「ア身長 イ慎重 ウ深長 エ伸張」
- ⑦ 「師走」の読み方は である。 「ア講師 イ公私 ウ行使 エ格子」
- ⑧ 「顧みる」の読み方は である。 「アしそウ イしわす ウししよう エしばしり」
- ⑨ 「華美」の類義語は である。 「アかえりみる イこころみる ウかんがみる エしみる」
- ⑩ 「発覚」の類義語は である。 「ア地味 イ派手 ウ華奢 エ清廉」
- ⑪ 「協力」の対義語は である。 「ア露見 イ知見 ウ確信 エ理解」
- ⑫ 「受容」の対義語は である。 「ア努力 イ個人 ウ侵略 エ妨害」
- ⑬ 何の縁も関係もない人を「の他人」という。 「ア排除 イ廃止 ウ撤回 エ停止」
- ⑭ 弟子入りを願って訪れることを「をたたく」という。 「ア扉 イ窓 ウ戸 エ門」

⑮ 自分の狭い知識や考え方にとらわれて、他の広い世界のあることを知らないで得々としているさまを「□の中の蛙
大海を知らず」という。 「ア川 イ池 ウ井 エ桶」

⑯ 「来る」の謙譲語は□である。

「アいらっしゃるイお越しになるウ伺う エおいでになる」

⑰ 「寒い」と同じ品詞の語は□である。

「ア柔らかい イ冷える ウそして エ素敵な」

⑱ 熟語の構成として「濃紺」と同じものは□である。

「ア小島 イ休憩 ウ吉凶 エ未完」

⑲ 古典日本三大随筆の一つである『方丈記』の作者は□である。

「ア紀貫之 イ兼好法師 ウ清少納言 エ鴨長明」

⑳ 『暗夜行路』は、白樺派の□が書いた長編小説である。

「ア川端康成 イ芥川龍之介 ウ島崎藤村 エ志賀直哉」

第二問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

英国の^{*1}クローン羊ドリーがたいへんな話題となった。そして次の年にはわが国のクローン牛が引き続き話題となった。両者とも、成長したほ乳類の体細胞から遺伝的にまったく同一のクローンを作る技術であった。

X 世間の反応は**いぶん異なっていた**。羊の場合には、この技術が「神の（a）**摂理**に反するものだ」といった宗教的、倫理的次元にまで及んだが、牛の場合には、「安価で優秀な牛を得られる」といった実用的側面に主に議論が集中した。同じ技術に対するこの反応の差は、**いったい何を意味しているのだろうか**。

クローン羊の存在が報じられたとき、この技術が人間にも応用されれば、独裁者が自分のコピーを作ったらどうなるのか、とか、自分のクローンを作っておけば長生きできる、といった（b）**キョクタンな議論が噴出した**。これは、このクローン技術が、同じ人間を（複製）する技術と誤解されたからであり、**あたかも（かけがえのなさ）を^{*2}補填^{ほてん}してくれる技術であるかの幻想を与えたからである**。

事実、亡くした子どもと同じ遺伝子を持つクローン人間を作ってほしい、という親たちからの真剣な申し出がいくつもあつたと報じられた。しかし、万が一クローン人間技術が成立したとしても、**①このような手段で、あの（かけがえのない）子どもが再び戻ってくるのだ、と考えるのは明らかに幻想でしかない**。

亡き子、太郎の代わりに作られたクローン太郎と親の会話を想像してみよう。親は（あの）太郎が、そのまま戻ってきたと信じている。

「太郎と登った富士山はすばらしかったわね。あのとき、太郎は転んでけがをして大泣きしたけど」

「えっ？ ボクは富士山なんか行っていないよ」

「なに言ってるの。みんなで行ったじゃない」

「それはボクじゃないよ」

「太郎、あなたは嘘つくような子どもじゃなかったはずよ」

こうして親は〈この〉太郎は、さまざまな体験をともにした〈あの〉太郎ではないことを発見する。②〈この〉太郎と〈あの〉太郎は、外見は似ているが、まったくの別の人格なのである。

遺伝子が同じで、外から見ればそっくりだからと言って、同じ人間が二人いるわけではない。ある他者の〈かけがえのなさ〉はどんな技術をもつても乗り越えることができない。その交流は再現することができない一回限りの出来事なのである。「記憶の複製」や「人格の移植」はSFの世界では格好の話題だが、現実的には実現不可能であるばかりではなく、^{※3}原理的に不可能な夢想であるように思われる。

しかしそれでも、クローン技術によって同じ人間が戻ってくる、と考えてしまうのは、現代社会がまさに、(c) 厳粛な〈かけがえのなさ〉を^{※4}超克しようとして^{※5}邁進しているからである。今日、人々は代替可能なモノに囲まれて生活している。対価を払えば、古くなった製品は新しいモノに交換可能だし、社会経済は、まさに人々があらゆるモノを買い換えてい

くことで成立している。(同じ)モノが基本的に所有可能であること、Y〈すげ替え可能〉が、現代の我々の基本姿勢である。

さらにテクノロジーは、臓器移植など、人間の身体を(同じ)ものですげ替えるという可能性を開きつつある。そして、③この姿勢は、すげ替えが不可能であるはずの対人関係をも(d)シンシヨクしようとしている。現代人の欲望は、〈私〉を中心に、(他者をも含む)あらゆるものが〈私〉のために整備されていることを望むまでに深まったのかもしれない。

二十年前の^{※6}試験管ベビー誕生以来、^{※7}代理母、^{※8}凍結受精卵、^{※9}精子銀行など、生命の誕生を操作する生殖技術に対して、常識はそのつど「A」と述べ続けてきた。しかし、夫婦間の体外受精が今では〈自然な〉技術として受け取られているように、クローン羊の衝撃は、今日では、もはや自然な技術として人々に受け入れられ、定着しつつあるのだろうか。

Z、常に(同じ)牛肉が安定供給されている現代にあつては、牛は工業製品と同じに見なされているということなのだろうか。

いずれにしても、現代の欲望は動物にまで、(同じ)ものすげ替え可能性を広げた。すべての存在は、補填可能だといふ思いの定着。このような流れのなかで、人々は〈喪失〉を受け入れることができなくなつてゆく。だが喪失の痛みこそ〈かけがえのなさ〉とBのものであり、それに耐えられないということは、なにか現代人の根本的な(e)スイジヤクを示しているのかもしれない。

(黒崎政男『デジタルを哲学する』より)

(※1) クローン 一つの細胞または個体から、受精の過程を経ず、細胞分裂を繰り返すことによって生ずる細胞群

または個体。全く同一の遺伝子構成をもつ。

(※2) 補填 不足をおぎないうめること。欠損をみたすこと。

(※3) 原理的 ある法則を成り立たせている基本的な仕組みに基づくさま。

(※4) 超克 困難や苦しみにうちかち、それを乗りこえること。

(※5) 邁進 恐れることなく突き進むこと。

(※6) 試験管ベビー 体外人工授精児のこと。母体から卵子を取り出し、体外で人工授精させ、再び子宮内に戻して

着床妊娠させる。

(※7) 代理母 他人のために他人の受精卵を自分の子宮に入れて妊娠・出産する女性。

(※8) 凍結受精卵 体外受精をさせた受精卵を冷凍保存したもの。

(※9) 精子銀行 多くの男性から精子の提供を受けて冷凍保存しておき、精子を必要とする女性に体外受精をする

会社のこと。

問一 二重傍線部（a）から（e）について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二

 から

 の空欄に入る接続語として適切なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ つまり ウ たとえば エ けれども オ そして

問三 傍線部①「このような手段」について、本文中の語句を用いて「 という手段」に続くように二十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「 の太郎と の太郎は、外見は似ているが、まったくの別の人格なのである。」とあるが、その理由を、本文中の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部③「この姿勢」について、「 という姿勢」に続くように二〇字以内で抜き出して答えなさい。

問六 空欄

 に入る言葉を、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問七 空欄 B には、「二つの物の関係が密接で切りはなせないこと」という意味を表す四字熟語が入ります。解答用紙の

空欄を埋めて四字熟語を完成させなさい。

問八 本文の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 英国のクローン羊や日本のクローン牛に対しては、宗教的、倫理的次元で批判的な反応が見られた。
- イ 同じ遺伝子を持つクローン人間を作ることによって、子どもを亡くした親たちの希望が実現した。
- ウ 現代人の基本姿勢は、身の回りのあらゆるモノは対価を払えば〈すげ替え可能〉であると考えるものである。
- エ 現代のテクノロジーの進化により、人間の身体や対人関係を〈同じ〉ものですげ替えるということが可能になった。
- オ 試験管ベビー、代理母などの生殖技術は、成立してから今に至るまで自然な技術として受け入れられている。

第三問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

歩きながら、私は涙がとまらなかつた。二十一にもなつた女が、びよおびよお泣きながら歩いているのだから、他の人たちが[※]いぶかしげに私を見たのも、無理のないことだつた。それでも、私は泣きやむことができなかった。

デュークが死んだ。

私のデュークが死んでしまつた。

私は悲しみでいっぱいだつた。

デュークは、グレーの目をしたクリーム色のムク毛の犬で、プーリー種という牧羊犬だつた。わが家にやってきた時には、まだ生まれたばかりの赤んぼうで、廊下を走ると手足がすべつてぺたんとひらき、すーっとお腹^{なか}ですべつてしまつた。それがかわいくて、名前を呼んでは何度も廊下を走らせた。(そのかつこうがモツプに似ていると言つて、みんなで笑つた。) たまご料理と、アイスクリームと、梨^{なし}が大好物だつた。五月生まれのせいにか、デュークは初夏がよく似合つた。新緑のところに散歩につれていくと、匂^{にお}やかな風に、毛をそよがせて目をほそめる。すぐにすねるたちで、すねた横顔は[※]ジェームス・ディーンに似ていた。音楽が好きで、私がピアノをひくと、いつもうづくまつて聴いていた。そうして、デュークはとても、キスがうまかつた。

死因は老衰で、私がアルバイトから帰ると、まだかすかにあたたかかつた。ひざに頭をのせてなでているうちに、いつのまにか固くなつて、つめたくなつてしまつた。デュークが死んだ。

次の日も、私はアルバイトに行かなければならなかつた。玄関で、みように明るい声で「行ってきます」を言い、表にでてドアをしめたとたんに涙があふれたのだつた。泣けて、泣けて、泣きながら駅まで歩き、泣きながら改札口

で定期を見せて、泣きながらホームに立って、泣きながら電車に乗った。電車はいつものとおり混んでいて、かばんをかかえた女学生や、コートを着たおつとめ人たちが、ひっきりなしにしゃくりあげている私を^{※3}遠慮^{えんりょえしやく}会釈なくじろじろ見つめた。

「どうぞ」

無愛想にぼそつと言って、男の子が席をゆずってくれた。十九歳くらいだろうか、白いポロシャツに紺のセーターを着た、ハンサムな少年だった。

「ありがとう」

蚊のなくような涙声でようやく一言お礼を言って、私は座席にこしかけた。少年は私の前に立ち、私の泣き顔をじっと見ている。深い目の色だった。私は少年の視線にすくめられて、なんだか動けないような気がした。そして、いつのまにか泣きやんでいた。

私のおりた駅で少年もおり、私の乗りかけた電車に少年も乗り、終点の渋谷までずっといっしょだった。どうしたの、とも、だいじようぶ、とも聞かなかったけれど、少年はずっと私のそばにいて、満員電車の（a）ザットウから、さりげなく私をかばってくれていた。少しずつ、私は気持ちがおちついてきた。

「①コーヒーごちそうさせて」

電車からおりると、私は少年に言った。

十二月の街は、あわただしく人が往^いき来^きし、^{※4}からっ風がふいていた。クリスマスまでまだ二週間もあるのに、あちこちにツリーや天使がかざられ、ビルには歳末^{さいまつ}大売り出しのたれまくがかかっていた。喫茶店に入ると、少年はメニューをちらつと見て、

「朝ごはん、まだなんだ。オムレツもたのんでいい」

ときいた。私が、どうぞ、とこたえると、うれしそうににこつと笑った。

公衆電話からアルバイト先に電話をして、風邪をひいたので休ませていただきます、と言ったのを聞いていたとみえて、私がテーブルにもどると、

「じゃあ、きょうは一日ひまなんだ」

少年は②ぶつきらぼうに言った。

喫茶店をでると、私たちは坂をのぼった。坂の上がいいところがある、と少年が言ったのだ。

「ハハ」

彼が指したのは、プールだった。

「じょうだんじゃないわ。この寒いのに」

「温水だから平気だよ」

「水着持っていないもの」

「買えばいい」

(b) ジマンではないけれど、私は泳げない。

「いやよ、プールなんて」

「泳げないの」

少年がさもおかしそうな目をしたので、私はしゃくになり、だまったまま財布から三百円をだして、入場券を買ってしまった。

十二月の、しかも朝っぱらからプールに入るような^{※5}酔狂^{すいきょう}は、私たちのほか誰もいなかった。おかげで、そのひろびろとしたプールを二人で独占してしまえた。少年はきびきびと準備体操をすませて、しなやかに水にとびこんだ。彼は、魚のようにじょうずに泳いだ。プールの人工的な青も、^{※6}カルキの匂いも、(c) 反響する水音も、私にはとてもなつかしかった。プールなど、いったい何年ぶりだろう。ゆっくり水に入ると、からだがゆらゆらして見える。とつぜんぐんぐんと前にひっぱられ、ほとんどころぶようにうつぶせになって、私は前に進んでいた。まるで、誰かが私の頭を糸でひっぱってでもいるように、私はどんどん泳いでいた。すつと、糸をひく力が弱まった。あわてて立ちあがって顔をふくと、もうプールのまんなかだった。三メートルほど先に少年が立っていて、私の顔を見てにっこり笑った。私は、泳ぐって、気持ちのいいことだったんだな、と思った。

少年も私も、ひとことも言わずに泳ぎまわり、少年が、「あがろうか」

と言った時には、壁の時計はお昼をさしていた。

プールをでると、私たちはアイスクリームを買って、食べながら歩いた。泳いだあとの疲れもここちよく、アイスクリームのあまさは、舌にうれしかった。このあたりは、少し歩くと閑静な住宅地で、駅のまわりの^{※7}喧騒^{けんそう}がうそのようだった。私の横を歩いている少年は背が高く、(d) 端正な顔立ちで、私は思わずドキドキしてしまった。晴れたま昼の、冬の匂いがした。

地下鉄に乗って、私たちは銀座にでた。今度は私が「いいところ」を教えてあげる番だった。裏通りを十五分も歩くと、小さな美術館がある。めだたないけれどこぢんまりとした、いい美術館だった。私たちはそこで、まず中世イタリアの宗教画を見た。それから、古いインドの^{※8}細密画を見た。一枚一枚、たんねんに見た。

「これ好きだなあ」

少年がそう言ったのは、くすんだ緑色の、象と木ばかりをモチーフにした綿密画だった。

「古代インドはいつも初夏だったような気がする」

「ロマンチストなのね」

私が言うと、少年はてれたように笑った。

美術館をでて、私たちは落語を聴きにいった。たまたま演芸場の前を通って、少年が落語を好きだと言ったからなのだが、いざ中に入ると、私はだんだんゆううつになってしまった。

デュークも、落語が好きだったのだ。夜中に目がさめて下におりた時、消したはずのテレビがついていて、デュークがちよこんとすわって落語を見ていた。父も、母も、妹も信じなかったけれど、ほんとうに見ていたのだ。

デュークが死んで、悲しくて、悲しくて、息もできないほどだったのに、知らない男の子とお茶をのんで、プールに行って、散歩をして、美術館をみて、落語を聴いて、私はいったい何をしているのだろう。

だしものは、[※]大工しらべ[※]だった。少年は時々、おもしろそうにくすくす笑ったけれど、私はけっきょく一度も笑えなかった。それどころか、だんだん心が重くなり、落語が終わって、大通りまで歩いたころには、③もうすつかり、悲しみがもどってきていた。

デュークはもういない。

デュークがいなくなってしまう。

大通りにはクリスマスソングが流れ、うす青い夕暮れに、ネオンがぼつぼつつきはじめていた。

「今年ももう終わるなあ」

少年が言った。

「そうね」

「来年はまた新しい年だね」

「そうね」

「今までずっと、僕は楽しかったよ」

「そう。私もよ」

下をむいたまま私が言うと、少年は私のあごをそっともちあげた。

④今までずっと、だよ」

なつかしい、深い目が私を見つめた。そして、少年は私にキスをした。

私があんなにおどろいたのは、彼がキスをしたからではなく、彼のキスがあまりにもデュークのキスに似ていたからだ。ぼうぜんとして声もだせずにいる私に、少年が言った。

「僕もとても、愛していたよ」

淋しさびそうに笑った顔が、ジェームス・ディーンによく似ていた。

⑤それだけ言いきたんだ。じゃあね。元気で」

そう言うと、青信号の（e）テンメツしている横断歩道にすばやくとびだし、少年は駆けて行ってしまった。私はそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。銀座に、ゆっくりと夜がはじまっていた。

（江國香織『つめたいよるに』より）

(※1) いぶかしげ

あやしい、変だと思っているさま。

(※2) ジェームス・デーモン

アメリカ合衆国の俳優（一九三一〜一九五五）。

(※3) 遠慮会釈

つつましく控えめにして、他人のことを思いやること。

(※4) からっ風

冬季、日本海側から山脈を越えて太平洋側、特に関東平野に吹きおろす風。

(※5) 酔狂

好奇心から、人と異なる行動をとること。

(※6) カルキ

水道水やプールの消毒に用いられる薬剤。

(※7) 喧騒

物音や人声のうるさく騒がしいこと。

(※8) 綿密画

対象を精密にこまごまと描いた絵画のこと。

(※9) 大工しらべ

落語の演目のひとつ。

問一 二重傍線部 (a) から (e) について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 傍線部①「コーヒーごちそうさせて」と言った「私」の心情として最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 強がってアルバイトに行こうとしたが、コーヒーを飲む方が気晴らしになると考えている。
- イ 抑え切れない悲しみが、少年の思いやりのある態度によって薄まったため、感謝している。
- ウ 初めて会った少年が満員電車で自分をかばってくれることに対して、疑問に思っている。
- エ 悲しい気持ちを少年に聞いてもらうことで、気晴らしになるのではないかと考えている。

問三 傍線部②「ぶつきらぼうに言った」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「ぶつきらぼうに言った」とはどのような様子か。最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。
- ア 遠慮せず好き勝手にふるまう様子
 - イ 相手を気遣い優しく語りかける様子
 - ウ 態度や話し方がそっけない様子
 - エ 度をこして大きな声を出す様子

(2) 「ぶつきらぼう」とほぼ同じ意味で使われている表現を、本文中より漢字三字で抜き出しなさい。

問四 傍線部③「もうすっかり、悲しみがもどつてきていた」理由として、最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 少年が落語を楽しんでいる一方で、「私」はまったく面白さがわからず、退屈になってしまったから。
- イ アルバイトを仮病で休んだことを後悔し、一度も笑えなかったから。
- ウ 少年と楽しく過ごした今日一日が、もうすぐ終わりに近づいているということに、悲しくなったから。
- エ デュークも落語が好きだったことを思い出し、デュークが亡くなった悲しみが再び押し寄せてきたから。

問五 傍線部④「今までずっと、だよ」を具体的に説明しているものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 今朝、電車で「私」と出会ってから今までの時間は、楽しかったということ。
- イ 「私」にコーヒーを「ごちそうしてもらったことへ、感謝しているということ。
- ウ 「デューク」として「私」に今までのお礼ができ、満足しているということ。
- エ 「デューク」として「私」と過ごした日々は、楽しく幸せだったということ。

問六 傍線部⑤「それだけ言いに来たんだ」とあるが、少年が「私」の前に現れた目的は何か。「デューク」という言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

